ＬＤ教育プロジェクト講演会（８月４日）の報告

夏休み中にもかかわらず３００名以上の参加がありました。簡単に４分科会と講演会について報告します。

分科会１「ＬＤ児・ＡＤ／ＨＤ児への理解を深める－ＬＤ擬似体験プログラムを通して－」

堺市立向丘小学校　　教諭　米田和子

LD 擬似体験プログラムは、文字や絵、文章をうまく読み取れない体験、指示をうまく聞き取れない体験、迷路を使った不器用さの体験などから、LD の心理的擬似体験し、それについて小グループで意見を出し合う、という内容だった。LD についての知識があまりない人の参加が多かったからか、初めは話し合いや意見交換に活気がないようにも感じた。だが、会が進行するにつれて意見も出て来るようになり、また、自分自身が疑似体験することによって理解を深めることができたと思う。

分科会２「読み書きの指導」　　高槻市立芥川小学校　　教諭　植村美栄子

「文字を読めて書ける」ためには、聴覚、音声、視覚、運動が関わっているが、今回は聴覚と視覚を中心に説明された。

視覚系の問題が大きいと、運筆練習がうまくできなかったり、文字を書くと線と線が重なり合うところが重ならなかったり、はねるところが左右逆になったりする。これらは読み書きの入門期に多いことだが、それがいつまでも残っていないかどうか、教育現場で見極めることが大切である。文字の習得に向けての指導基礎項目としては、眼球運動に関する学習、目と手の協応学習、形態知覚の学習、視覚記憶の学習、視覚の概念化の学習があげられる。運筆練習や点つなぎが苦手な子に、単に何回も書く練習をさせてもうまくいかない。そのような子には何が課題なのか逆のぼり、必要な個別指導をすることが大切である。

聴覚系が弱いと、耳から入ってくる音の判別や知覚に障害があるため、語頭・語尾の聞き間違い、文字を見ても発音できずに読めない、黙読のほうが理解できるということがある。また、聴覚弁別、聴覚記憶が弱いと、表記に似た音の混同や特殊音節の書き間違いが見られる。これらは不注意優勢型の子に多いと言われる。聴覚的な不注意が原因となり、

集団の中で言われたことを聞き落とす、音源がわからず聞き逃す、早口で言われるとわからないということが見られる。聴覚系に弱さをもつ児童への指導基礎項目として、ことばのリハーサルがある。普通は頭の中でもう一回ことばを言っているが、メタ認知の弱さをもっていると、言い直すことをしない。３単語ずつのしりとりをするなどして、記憶とリハーサルをゲーム化させる。他に、聴覚記銘力、音韻操作能力、音の弁別力、概念形成、聴覚的注意集中・注意選択・注意の焦点化を高める指導を行う。

「通常の学級での支援」　　高槻市立芥川小学校　　教諭　大石博子

クラスに学びにくさをもっている子がいるのではないかということを念頭において、通常学級の中で工夫したらできることについて述べられた。支援や工夫のポイントは、「よさを認める」、「強さを学習場面で生かす」、「苦手なことで追い詰めない」ことである。悪いところばかりでなくよいところをさがしてあげることが大切である。追い詰めると逃げの姿勢を作り、悪循環になる。授業では、途中に休憩を入れながら集中時間をのばしていく。時計を見ながら目標時間を決めて子どもにゴールをわかりやすくするとよい。座席の位置は、子どもの意見も聞き、声かけのできやすい前の席にする。その子にだけわかる声かけや合図を決めておく。子どもたちへの指示は、言語と文字を使い、一度に出す指示は少なめにする。低学年は、指示を同じように声に出して言わせるとよい。板書は、大きめの文字で、書く場所に目印の磁石をつけたり、書く順番を書いて見通しを持たせる。みんなが書き終わったところを消していくとゴールが見えやすくなる。発表で、答えられない時は、パスのルールを使えるようにする。声が小さい時は教師が代弁をして、さりげなく通過する。プリント類は子どもの希望を聞いて、拡大コピーしたものを用意する。文を書くプリントは横書き、縦書き、罫線、マス目など数種類用意して、子どもが書きやすいものを自分で選択できるようにする。これらの支援は、特別にするのではなく、クラスのみんなも使えるようにすることが大切である。

分科会３「子どものソーシャルスキルのあり方をさぐる」

堺市立日置荘小学校　　教諭　上嶋　恵
堺市立五箇荘東小学校　教諭　苫広みさき

ＬＤ周辺の子ども達は、読み書きの困難のほかに社会的なスキルの困難もかかえている。通級教室のプログラムやゲームランドの取り組みの中で、スキルを伸ばしていく子どもの話を聞きました。人とよくしゃべるけれども本当に人を受け入れているかというと、教室の床に先生と一緒に寝るということがリラックスしてできず、すぐ立とうとするなどは、人との関係にガードをもっているということだというような興味深い話もありました。

会場からは、眼球コントロールについての質問が出て、一点凝視や追視の訓練方法を具体的に教えてもらいました。また、聴覚のトレーニングは音楽を使ってするのが有効だということでした。

通常学級の先生との連携についての質問も出され、特別支援のネタをたくさん持っていることで重宝される教材ステーションになることが大事だと思いました。

分科会４　「行動の問題　－中学校での気づき－」

高槻市立第９中学校　　教諭　石井幸子
高槻市立如是中学校　　教諭　中村敏子

はじめに、中村先生から中学生の問題行動やそういった行動を起こす中学生の状況をどう見るかというテーマで報告がありました。ＬＤやＡＤＨＤ等の障害児の多くが、通常学級に在籍しているため、通常学級の教師に子どもの状況を知る力が必要になっていることや、指導のポイントが報告されました。また、そういった子ども達のために特別支援教室を立ち上げる必要があるのではないかという提案がありました。続いて、石井先生から、指導上のポイントについて報告がありました。中学生以上の子ども達には、「今もっている力で社会に出たら何ができるか」というトップダウンの考え方が必要になってくること、そのために教師も含めた周囲への障害の理解をすすめる必要性や本人の障害受容について話されました。また、実際の指導について具体的に報告されました。

講演会「算数の指導」　　筑波大学助教授・ＬＤ学会理事　熊谷　恵子先生

数学を遂行するときに使われる能力には、多くのものが関係しているが、根本的に言語とはきってもきれない関係にある。数詞（言語的・聴覚的)、数字（言語的・視覚的)、具体物（非言語・操作的・視覚的）の３つの関係が作られることが数概念を形成する基礎になる。どのような認知能力の偏りが顕著かということで、数詞・数字・具体物のそれぞれの獲得、あるいはそれぞれとの関係の作られ方に特徴が出てくることになる。

認知能力によって学習スタイルを考える。ＷＩＳＣの結果から、動作性ＩＱ＞言語性ＩＱなら、視覚的な刺激を処理することが強いので言語による指導よりも図や絵による指導がよい。言語性ＩＱ＞動作性ＩＱなら、言葉による指導がよい。また、Ｋ－ＡＢＣの結果から継次処理、同時処理がわかる。継次処理優位なら、段階的な教え方、部分から全体、順序性の重視、聴覚的手がかり、言語的手がかりによる指導がよい。同時処理優位なら、全体をふまえた教え方、全体から部分、関連性の重視、視覚的手がかり、運動的手がかりによる指導がよい。数学学習には継次処理も同時処理もすべてが必要だが、学習の入り方・

指導の入り方に注意したい。

例えば、九九の習得のさせ方では、九九を唱え、それを暗記させることに重点を置く方法（継次処理優位）と、九九の表を活用することで空間の中での位置関係から式を暗記するということに重点を置く方法（同時処理優位）がある。計算式の指導では、手続きの言語化、使いやすい規則、視覚的手がかりなどをわかりやすく提示する。測定や定規の使い方の指導は、順序を細かいステップで区切り言語化する方法（継次処理優位）と、始めと終わりの状態を示しその間の手順をなるべく少なくして図で表す方法（同時処理優位）がある。文章題や推論は、継次処理型学習者では演繹的推理、同時処理型学習者では帰納的推理により物事の関連性を把握させる。最終的にはどちらの推論も可能とならなければならないが、認知機能に偏りがある子には、それぞれ得意な推論の方向性があるので、それによってまず物事の関連性をつかませることが必要である。空間的な関係については、継次処理型学習者では次元を落とした方がわかりやすい。例えば時計の学習では円形で表される時計を真っすぐの帯状にして、これが丸くなると時計になると説明する。同時処理型学習者では円形のまま扇形に区切って説明する。カレンダーは継次処理型学習者では１日から順に縦に並んでいるタイプ（１次元）がわかりやすく、同時処理型学習者では一週間ずつ横に並び縦が曜日でそろっているタイプ（２次元）がわかりやすい。板書で使う矢印は、継次処理型学習者は操作の方法を順番に１方向に示すものがわかりやすく、同時処理型学習者は矢印の方向性に意味を持たせるものがわかりやすい。また絵を使用する場合は、継次処理型学習者は直線的な配置（例３＋２：蝶が３匹と２匹まっすぐに並んでいる絵）同時処理型学習者は意味がわかる絵（花の周りに３匹の蝶がいるところに２匹飛んできた絵）がよい。

以上のように、算数・数学の学習指導も長所や高い能力を使いながら、概念化や計算スキル、操作スキルを身につけさせるものである。このように、どんな教材を使ったらよいのかだけでなく、どういう手順で教材を提示するか、指導の展開の仕方についても考えなければならない。しかし、動機付けだけは高めることは指導の鉄則である。ご褒美のシール等だけでなく、高い能力をうまく使うことによって、本人が短期間で高い能力をつけることが動機付けになる。